



『SDGsな野生動物のマネジメント 狩猟と鳥獣法の大転換』

羽澄俊裕 著

2022年2月
地人書館 発行
237頁

定価 3,520円 (本体 3,200円+税)

浅川満彦 (酪農学園大学 獣医学群 獣医学類 感染・病理学分野
医動物学ユニット / 野生動物医学センター WAMC)

野生動物医学会の刊行物を丹念にお読みの学生の皆さんに対しては何も心配していないが、入学したばかりの獣医大生のほとんどが救護を保護と同一視している。いや、保護の概念すら持ち合わせていないかも…。言うまでもなく、前者は愛護精神に基づく傷病個体の救命やケアを、一方、後者は個体群・メタ個体群から種・その生息環境までをまもることを意味する。その理解は、学業のスタートラインに立ったばかりの新生児にとって、人生を規定するモノゴトに関わる場合もある。したがって、本心を吐露するならば、大学入学前に理解し、適切な学部学科を選択し、間違えて獣医学科に来ないで欲しいのだが (以上、浅川, 2021a)。

その点で、本書は見事にその役を果たしている。もし、「野生動物の保護をしたい!」という意志がある程度強固ならば、中高生でも十分読みこなせる。この著者は日本における保護実践の先駆的機関「株式会社 野生動物保護管理事務所 WMO」を創設(1983年)したレジェンドである。ところで、社名にも冠した保護に関しては、本書 149 頁で興味深い論考が展開されている。著者によると、保全との使い分けは“好み”であり、また、“保護管理”は概念不明瞭という。ここまで自虐的に来られると「コアカリ野生動物学の教育上、忌々しき大問題!」という正論は引込め、むしろ清々しい気にさせる。しかし、獣医学初学者にとっては、混乱に拍車をかけること必至。なにしろ、彼らの眼前には三つ巴状態となった保護・保全・救護が存するのだから。

さて、既に何度も出てきた救護だが、本書では出ていない。そればかりか、獣医学や獣医療という語も無い。唯一、ガバメント・ハンターに規定される資格の峻厳さの比喩として“獣医師免許”が出てきただけだ (175 頁)。このことは、(著者は無意識だったろうが) 野生動物の保護管理 (本書では“環境マネジメント”) において、獣医学はほぼ関わりなしというメッセージだろう。

話が前後したが、本書は二つの部に分かれ、最初は動物臭い各論的・列挙的な内容である。まず、日本における野生哺乳類(一部、

ウ類や猛禽類などの鳥類) 相の生物地理学的概観に始まり (!), 狩猟と不殺生の思想の歴史の変遷の解説に驚かされ、カモシカ、ニホンジカ、イノシシ、ニホンザル、2 種クマ類の記述であった。本書キャパから、詳述するには限界があるので、それぞれの種に関し、日本語の優れた書籍に引き継いである。そう、本書は書籍ガイドブックの機能も併せ持つ。初学者は、まず、そこに挙げられた書物を逐一読まないといけない。

後の部は、鳥獣保護管理法を中心にした動物法の現状と問題点の論考である。このパートを通読した途端、頭を殴られた気がした。奇しくも、本書と同時に (それも同じ出版社から)、評者は法獣医学の書を上梓し (浅川, 2021b), この本の第 6 章で動物法を概観した。しかし、この本と比較し、あまりにも浅薄な代物と悟り、血の気を失ったのだ。そもそも、拙著冒頭で示した“無主物”という語すら、フワっとした形で使っていた。これも、こちらの本では法学的な説明がなされた。一事が万事、野生動物の法に関し、これほど優れた論考は、他書ではお目にかかれなと思う。

一点気になるのが第 1 次産業。要するに過疎地域の活性化が期待される産業としての文脈で何度か語られていたが、背景となる人口減だからこそ、加工業 (第 2 次産業) に近いという理解は必要だろう。まず、日本の畜産業では、家畜に与える餌資源は約 75% が国外からの輸入に依存している。また、スマート農業という語の裏には (直接的労力軽減のため)、作業の多くが石油資源に依拠していることを示すのだ。攻めの農業で国外から注目されるのは、農家さんたちの細やかで丁寧な仕事に対してである。だが、食糧 (あるいは食料) 自給という文脈では語ることは不可能で、SDGs ですらないことは指摘しておこう。

引用文献

- 浅川満彦. 2021a. 野生動物の法獣医学-もの言わぬ死体の叫び, 地人書館, 254pp, 東京.
- 浅川満彦. 2021b. 野生動物医学への挑戦-寄生虫・感染症・ワンヘルス, 196pp, 東京大学出版会, 東京.